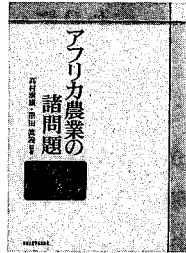


# 「資料紹介」

高村泰雄・重田眞義編著 ア  
フリカ農業の諸問題 京都  
京都大学学術出版会 1998年  
363p.



本書はアフリカ農業の研究に長年携わってきた、さまざまな分野の専門家たちによって書かれた論文集である。収められている11編の論文の内容は、アフリカの農業発展論、農村社会変容の事例研究、さらには特定作物を扱った農学的研究まで、実に多岐にわたっている。

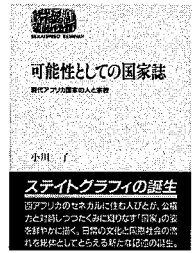
各論文の著者の専門は、人類学、農林経済学、土壌学、作物学、育種学などさまざまである。しかし各章には初学者も理解しやすいように各専門分野の概説的な部分を含める配慮が施されており、専門家向けの学術論文という体は消えていて読みやすくなっている。

それぞれの論文には、各研究者のアフリカ農業に対する思い入れがよく表れていて、興味深い。本書の冒頭で述べられているように、この本全体を貫く方向性は「アフリカ農業の可能性に寄せる期待」(p.5)である。アフリカ農業の内発的発展や、在来農業科学の可能性を探ろうとする論文が含まれていることに、そのような「期待」を如実に見ることができる。各研究者の長年のフィールドワークの結果得られた事実を裏づけとした、アフリカ農業と農民の実践に対する敬意が、それぞれの論文の背景に見てとれる。

アフリカ農業の「諸問題」の範囲は広く、かつ根深い。編者の一人である高村氏が最終章で述べているように、今後はアフリカ農業全体の問題を検討するとともに、地域固有の課題への取り組み方がますます求められてくるだろう。そんな時、マクロ統計に拠った表面的な議論ではない、詳細かつユニークな主張に出会えるのが本書の最大の特徴である。

(高根 務)

小川 了著 可能性としての  
国家誌——現代アフリカ国家  
の人と宗教 京都 世界思想  
社 1998年 291p.



本書において著者が試みているのは、セネガル共和国の国家誌である。「国家誌」という耳慣れない言葉について著者は、「制度としての国家と、その内実である国民の両者が相克しつつ浮かび上がらせている姿を描くというもの」(p.14)とのイメージを示し、人類学における記述実践の新たな手法としてこれを提唱している。著者は、微少な社会に関する記述という段階に民族誌はとどまり続けていてよいのだろうかというところから問いを起し、文化の担い手である現地の人々が経済や政治の動きときり結ぶ相互連関のありようを、究極的には世界システムにまで拡大される大状況のなかで把握し記述することの重要性を説く。

セネガル国家の独立後の歩みを追いながら、著者は、セネガル国家は人々の日常生活の水準においてかならずしも重要な役割を果たしてこなかったと指摘する。開発政策に失敗し、国民としての威信や誇りを提供できずにいる国家に代わって、人々の生存を保証しているのはインフォーマルな経済活動や取り引きであり、人々の精神的中核の役割を果たしているのはイスラム教団である。いわば国家は「サブカルチャー」(p.283)でしかないわけだが、にもかかわらず国家の統治が実現されているさまが、インフォーマルセクターとイスラム教団と国家との結びつきの記述を通して描かれている。

著者の提唱する「国家誌」の出色は、あくまで人々の日常実践へのこだわりを持った上で国家を論じていくところにあるのだろう。しかし、「国家と社会」という古典的図式に代表されるように、国家機構と国民の関係の解明は従来から政治学においても追究されてきたテーマであり、「国家誌」の提唱が人類学以外の学問領域にまでインパクトを与えうるものかどうかは判断しかねるところがある。「国家誌」構想に基づく今後の分析を待ちたい。

(佐藤 章)

吉本隆明著 アフリカの段階  
について 東京 春秋社  
1998年 173p.



ヘーゲルやマルクスの歴史観、モルガンやエンゲルスの発展史観を「アフリカの段階」概念の導入によって根本的に覆そうという壮大な試みの書である。

著者はヘーゲルらの歴史観、発展史観を「外在（文明）史」という概念と同義（p.142）のものにすぎないと批判し、そこに「内在（精神）史」を組み込んで歴史を総合する必要性を主張する。マルクスのアジア的生産様式概念はその不十分な試みであった。「未明の社会の世界普遍的な共通性」（p.4）としてアフリカの段階を抽出し、歴史に正しく位置づけることこそ、外在史的な未来と内在史的な過去とを解明する唯一の方法だと著者は言う。

内在史そしてアフリカの段階を組み入れた歴史の新たな見取り図は、端的に言えば、「外在的に進歩を追跡することが、同時に内在的に退歩を追跡することと同義だ」（p.108）というものである。ここでは高貴な未明社会と墮落した物質文明社会とが対照的に捉えられている。

著者の「アフリカ」は、言うまでもなく現実のアフリカではなく、そこから抽出したエッセンスでつくられた「人類史の母型」概念である。その意味で、本書の問題設定は、かつて土地占取様式の「母型」として「ブラック・アフリカ農業社会」を捉えた赤羽裕氏（『低開発経済分析序説』）と同じ発想に基づいている。

現実のアフリカを相手に仕事をしている評者から見ると、こうした段階論的発想には違和感を覚えざるを得ない。なぜアフリカは常に「母型」あるいはアーキタイプとして語られるのか。アフリカの段階に高貴な精神世界を指定する著者にアフリカへの蔑視は微塵もないのであろう。しかし、はからずもそれは、経済危機に呻吟するアフリカの現実を「未明社会の高貴な精神性」や「墮落した物質文明」の名の下に当然視することにならないか。現代アフリカの厳しい現実と著者が無知でないことが窺えるだけに、それに対する論理的理解の道筋が十分示されていない点に不満が残る。

（武内進一）

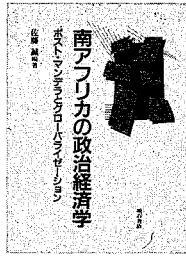
山田一廣著 マスカルの花嫁  
—幻のエチオピア王妃  
東京 朝日新聞社 1998年  
246p.



1931年。日本訪問を終えたエチオピア皇帝の従弟氏は、日本の女性は「淑やか」にして「家庭婦人として世界一」との見解を抱かれ「嫁に所望」、日本の一弁護士に相手の斡旋を依頼した。噂を聞きつけて多数の自薦者が現れたが、その一人はなんと華族のお嬢様であるK氏だった。周囲の人間には、良い生まれなのだから日本でいくらでもいい縁談があるのになぜ、と理解されず引き留められたが、ご本人は国際化の「先頭に立つ」べく意思固かったらしい。斡旋にあたった弁護士氏は、仮にも皇帝の従弟というやんごとないご身分の方にお世話するのだから、ただ淑やかなだけではなくやはり生まれもきちんとしていなければ、と考えていたわけで、K氏の応募をことのほか喜んだという。一応他の自薦候補と合わせて皇帝の従弟氏に写真・経歴などを送ったらしいが、やはり指名されたのは件のK氏であった。結局この嫁入り話は、第二次世界大戦へと続くイタリアのエチオピア侵略、日独伊三国防共協定締結という国際政治の流れに逆らえず、立ち消えとなるのだが—本書がとりあげているのは、「日本婦人を所望」したとか「それなりの家柄」が必要とか、ジェンダーの問題や血筋による差別に少しでも関心があるなら鼻白まずにはおれないはずの事件である。しかし著者は、次々とあらわれてくるそうした差別的なあるいは貴族趣味のエピソードを淡々と紹介するのみで、決して嘲笑したり否定したりしない。それだけでなく、この事件に関する著者の見解（おそらくあると思うが）は、本書を通じてほとんど明らかにされない。物語化をはかるでもなく、自己の視点で史的事実を組み替えるでもなく、ただ事の次第を明らかにするのみという著者のスタイルは、むしろ資料作成時の学術研究者のそれに近い。読み物としての面白みがないという悩みはあるが、日本・アフリカ交流史に関心のある人々に本書が得がたい情報を与えてくれることは間違いない。

（津田みわ）

佐藤 誠編 南アフリカの政治経済学——ポスト・マンデラとグローバルイゼーション  
東京 明石書店 1998年  
324p.



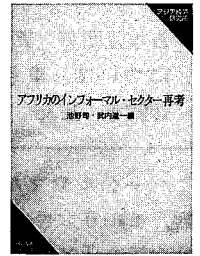
南アフリカ研究をフォローしている読者なら、立命館大学の佐藤教授の一連の仕事はよくご存じであろう。勁草書房発行の三部作『南部アフリカ』『新生南アフリカと日本』『南アフリカと民主化』に続いて、今回本書が著された。あとがきにもあるとおり、これは文部省科学研究費補助金国際学術研究（平成9年度）の成果である。

短期間に同じテーマで本を纏めることは、編者の高い企画力とテーマへの飽くなき探求心が必要とされるが、同書は若く清新な執筆者を新たに加え、新たな論題に勇敢に取り組むことで、その実を果たしている。それは南アフリカとアジアとの関係であり、1999年選挙を見据えたANCの一角優位体制分析であり、産業政策、土地改革問題、農村開発問題、南アフリカの新しい地域覇権の展望である。研究者レベルで日々更新される諸議論がこういったかたちで敏速に紹介され、後続する研究の道標として措定されていくことの意義はまことに大きい。またこれが一貫して、南アフリカを中心とした国外研究者との共同研究を母体としていることに刮目するのであり、研究総括の労苦を多とし、敬意を表したい。

上述したイシューの広がりからも分かるように、南アフリカ研究はますます広範化するパースペクティブと、理論的インプットと、斬新な提言力を求められるようになっていく。加えて、アフリカ社会科学の今後の進展にとって、南アフリカ研究に期待される貢献の仕方と、他地域研究との連携ぶりが一つの焦点ともなりつつある。たとえ明記はされていなくても、そういった研究進化の方向性が、本書の関心と問題設定および論考自体のなかに胚胎されているのが十分に感得されよう。その点で、南アフリカ研究者に止まらず、アフリカに関心を有する読者に広く読まれることを望む。

（平野克己）

池野 旬・武内進一編 アフリカのインフォーマル・セクター再考 東京 アジア経済研究所 1998年 vii+251p.



1980年代、わが国で蓄積された東南アジアやラテンアメリカ

のインフォーマル・セクター調査に比較して、国内アフリカ研究者グループによるインフォーマル・セクター研究は非常に限られていた。本書はその空白を埋める、待望された国内アフリカ研究者による初めての総合的インフォーマル・セクター研究書である。

本書は1995年度のアジア経済研究所「アフリカ諸国におけるインフォーマル・セクター」研究会、96年度の「アフリカ諸国における複合的就業構造」研究会の成果をまとめたもので、ケニア、コンゴ、ザンビア、タンザニア、コートジブワール、エチオピアでの現地調査および文献調査研究に基づいている。

全編を通して6人の筆者の問題意識は、フォーマルとインフォーマルの二元論の限界と、二元論に基づいたさまざまな支援策の限界、公的介入の意味、都市か農村といった活動地点による規定にある。

本書による貢献は、二元論的分析やその延長でのセクターの定量分析の意義を問い、インフォーマル・セクター卒業論や、世界中で拡大するマイクロクレジット推進論に対して再考の機会を与えていることにある。編者の池野による指摘「多面的複合的であるがゆえにインフォーマル・セクターの概念はこれまで便利な概念として使用されてきたが、その有効性を減じつつあるように感じられる」は鋭い。

付け加えるとすれば、公的介入とセクター盛衰の相関分析にまで踏み込んでもらいたかった。また、二元論を超えるためにもインフォーマル・セクターに代わる概念の提起が望まれる。

是非、ODA関係者、特に中小企業育成やマイクロクレジット関係者に一読をお勧めしたい。

（吉田栄一）